

小論文試験問題

・解答上の注意

1. 問題文は5枚、解答用紙は1枚（表・裏）、下書き用紙は1枚です。
2. 解答用紙に、一橋大学の受験番号を記入してください。氏名は記入しないでください。
3. 解答は横書きにしてください。
4. 解答用紙は、受験番号を記入する面が表になります。問1を表に、問2を裏に解答してください。
5. 解答用紙の追加、交換はしません。
6. 解答用紙の余白は採点者が使用するので、誤字脱字の訂正のほかは使わないでください。
7. 問題の内容についての質問には、応じません。
8. 試験終了後、問題文と下書き用紙は、持ち帰ってください。

小論文

問題文を読んで、次の問に答えなさい。

問1 問題文の著者は、「選択の自由」、「神の御意に従う自由」および「フーテンの寅さん」の自由に言及しているが、それぞれの自由の内容と相違を説明しなさい。(句読点も1字と数え、800字以内とする。)

問2 問題文の著者は、「選択の自由」と「神の御意に従う自由」のいずれも受け入れることができないと主張しているが、あなたが望ましいと考える自由のあり方について論じなさい。(句読点も1字と数え、1000字以内とする。)

〔問題文〕

ドイツの作家ミヒャエル・エンデには、『自由の牢獄』という短編がある。舞台は前近代のバグダッド、主人公は「インシアッター（神の御意のままに）」と呼ばれる盲目の乞食である。この乞食が、^{カリフ}教主の前で、自分の恐ろしい体験を語る。

この男は若いころ、みずみずしい力に満ち、うぬぼれた思い上がりで頭がいっぱいであった。そのため、「ギリシャの酒飲みと豚食いの影響」に陥り、「人間には自由な意志があり、おのれの裁量で、あくまでもおのれのなかから善や悪を生み出す」と信じ込むにいたった。このため、神の懲らしめを受けることになり、イブリース（イスラムの魔王）の誘惑を受けた。

男は、美しい踊り子に化けたイブリースに誘われ、不思議な場所に閉じ込められた。その場所は、巨大な円形の天井を持つ円形の建物のなかにあり、中央に円形の^{がしゅう}臥床があった。その円形の壁には、百十一もの同じ形の扉が均等にならんでいた。

この男の耳には、いつもイブリースの声が聞こえた。その声は、見分けのつかない多数の扉のなかから一つの扉を選ぶように迫りつづけた。声は次のように警告した。

「ある扉の向こうには、血に飢えたライオンが待ち構えていて、おまえを引き裂いてしまうかもしれぬ。また、別の扉の向こうは、かぎりない愛の歓喜をおまえに与えんとする妖精で一杯の花園かもしれぬ。三つ目の扉の後ろには、大男の黒人奴隷が不気味に光る剣をかまえ、おまえの首を打ち落とそうとしているやもしれぬ。四つ目の扉の陰には深淵が口を開けていて、おまえはそこに落ちるかもしれぬ。五つ目の扉の後ろには金や宝石が一杯入った財宝庫があり、宝はおまえのものになるかもしれぬ。六つ目の扉の向こうには、恐ろしいグール（食人鬼）が、おまえを食わんと待ち構えているかもしれぬ、といった具合だ。必ずしもそうだとは言わぬ。だが、そうかもしれないのだ。いいか、ここで、おまえはおのれの運命を選ぶのだ。良き運命を選ぶがよい」(エンデ、『自由の牢獄』)

この百十一の扉には鍵がかかっておらず、それゆえこの男は閉じ込められているわけではない。しかしこの扉は、一つを開けた途端に他の扉はすべて永遠に閉じられる。しかも、どの扉もまったく同じで何の手がかりもない。

「つまり、選ぶ理由は何もないというわけか？」わしは涙声で叫んでいた。

「理由はまったくない。おまえがおのれの自由意志で決めたというほかは」

「だが、どうして」絶望の思いでわしはわめいた。「どうして決めることができるのか？ 扉がどこに通じているのかわからないのに」

枯れ葉が風に舞うような音が聞こえた。それは姿なき笑い声のように響いた。

「それを知っていたことが一度でもあるのか？ 生まれてからこれまでというもの、おまえはあれやこれやと決めたときに、理由があると信じていた。しかし、真実のところ、おまえが期待することが本当に起こるかどうかは、一度たりとも予見できなかったのだ。おまえの理由というのは夢か妄想にすぎなかった。あたかも、これらの扉に絵が描かれていて、それがまやかしの指標としておまえをだますようなものだ。人間は盲目だ。人間がなすことは、暗闇の中へとなすのだ。……」

「知っているとも」わしは急いであいづちをうった。

「だからこそ、人が決めることはすべて、この世のはじまりから、アッラーの世界の計に前もって記されていると言われているのだ。良き決断であれ、悪しきそれであれ、愚かな決断も、賢しいそれも、おまえがおこなう決断という決断は、まさにアッラーが全部おまえに吹き込むのだ。アッラーは盲人の手をとるように、おまえを思うままに導く。すべてはアッラーが定めたことだというではないか。そして、それは大いなるアッラーの恵みだとも。だが、ここではおまえにアッラーの恵みはない。アッラーの手はおまえを導かないぞ」(エンデ、同書)

この自由の牢獄で男は、ひたすらに逡巡をくり返し、果てしない時間の経過のなかで、やがて疲れ果てて扉のことを考えないようになる。すると百十一あった扉が八十四に減り、それは目が覚めるたびに減りつづけた。やがて向かい合う両側に、扉が一つずつ残るだけとなった。それでも男は選ぶことができなかった。そしてついに扉が一つだけ残ったとき、「そこに残るか、それとも去るか」という決断を迫られた。男はそこに残った。

その次に目覚めたとき、扉はなくなっていた。壁はぐるりと一周し、白くぬっぺりとしていた。そしてイブリースの声もようやくやんだ。男は床に顔を伏せ、泣きながら、次の言葉を発した。

「この上もなく慈悲深き、気高き、尊き者よ、ありがたいことだ。自己欺瞞をことごとく退治し、偽りの自由をわしから奪ってくれた。もはや選ぶことができず、その必要もなくなった今、自己意志に永久の別れを告げ、不平不満をもらすことなく、理由も問わず、あなたの聖なる御心に従うことがやっとたやすくなった。わしをこの牢獄へ導き、この壁の中に永久に閉じ込めたのがあなたの御手ならば、わしは満足しよう。われら人の子は、盲目という御慈悲が与えられぬかぎり、とどまることも去ることもできない。盲目とはわれらを導く御手。わしは自由意志という妄想を永久に放棄しよう。自由意志とはおのれ自身を食らう蛇にほかならないからだ。完全な自由とは完全な不自由なのだ。不安や知恵というものはすべて、全能にして唯一の者、アッラーのもとにだけあり、そのほかは無にすぎない」(エンデ、同書)

こう言い終わると男は意識を失い、気づいたときに盲目の乞食となり、バグダッドの城門の前に倒れていた
のである。

この物語は、いかにもエンデらしい示唆に富んでいる。何よりも興味深いのは、多数の扉のついたこの不
思議な部屋が、フィンガレット（注1）の言う選択についての西欧的ステレオタイプを見事なまでに表現し
ている点である。訳者の田村都志夫が解説で述べているように、舞台はバグダッドであるが、論じられてい
るのは「全能の神」と「人間の自由」との矛盾に関する、キリスト教神学の永遠のアポリアである。

主人公はまったく本質的に同等な百十一の選択肢を与えられ、それが「完全な自由」だとされる。つまり
自由とは「選択の自由」のことである。可能な選択肢がすべて与えられていれば、その人は「自由」であり、
それゆえその状態で選んだ扉を開けて生じた結果は、自分で引き受けねばならない。これが「責任」をとる
ことである。こうして自由と責任とが結びつく。逆に、選択肢の一部が選択不能であれば、自由が制約され
ている。そうしてやむを得ず選んだ扉を開けて生じた結果については、免責される。

よく訓練された哲学者や社会学者や法律家を除けば、日本人にとって、「自由」という言葉から、多数
の扉のついた部屋を想像するのは普通ではない。私たちが「自由」という言葉から思い浮かべるのは、たと
えばフーテンの寅さんである。

世間のしがらみにとらわれず、風の向くまま気の向くまま、明日をも知れぬ身でありながら、恐れを抱く
こともなく、さすらう風来坊である。この自由のイメージは、網野善彦の「無縁」の概念と密接に関係して
いる（注2）。

日本語の「自由」が与えるイメージが、無縁者の姿であるとする、それが「責任」と結びつくことは考
えられない。なぜなら日本語の「責任」とは、どんなに嫌でもその場にとどまり、与えられた「役」を果た
すことだからである。役を果たせない者は「役立たず」であり、人間扱いしてもらえなくとも文句は言えな
い。たとえば、『大辞泉』の「責任」の項には、「立場上当然負わなければならない任務や義務」という説明
が与えられている。日本語の責任は「立場」から生じるのであり、「選択」から生じるのではない。

日本人が「自由は責任をともなう」などと言われても、サッパリ腑に落ちないのは当然である。せいぜい
思いつくことは、「人間を自由（＝無縁）にすると、何をしでかすかわからないので、多少は責任（＝縁）
で縛りつけておく必要がある、ということだな」というような理解である。「自由」は共同体に帰属せずに
漂泊する人生と結びつき、「責任」は共同体に帰属して定住する人生と結びついていると考えている人にと
っては、フィンガレットのいう岐路や、エンデの扉だらけの部屋を思いつくのはむしろ不自然である。

……もう少しエンデの物語を読み込んでいこう。この物語の興味深い点はほかにもある。エンデの主張
では、選択の自由というものは、じつはまやかしであり、結局のところ本質的な選択などそもそもできない
のであり、合理的選択を迫られる現代人は「自由の牢獄」に捉えられている、ということになる。

扉の数が無数にあり、その上、正しいと思って選んだことでも、期待通りの結果が出ることなどありえな
い、という指摘は、数理科学の観点からすればじつに正しい。

第一に、すでに述べた計算量爆発（注3）という問題があり、現実の問題への対処を考えようとする、
選択肢の数がとてつもない数になってしまうからである。エンデの物語では、百十一の扉という数が「狂気」
を示すことになっているが、これは計算量爆発の問題を指していると解釈しうる。

第二に、非線形性という問題がある。線形性というのは、大雑把に言うと、原因aが結果Aをもたらし、
原因bが結果Bをもたらす場合、原因(a+b)が結果(A+B)をもたらすという関係が維持されている
事態である。

箒^{ほうき}で部屋を掃除すれば綺麗になり、雑巾で掃除しても綺麗になるから、箒と雑巾とで掃除するともっと綺麗になる、というのは、おおよそ線形性を満たしているとみなすことができる。しかし、塩素系の漂白剤でトイレが綺麗になり、酸性の洗剤でもトイレが綺麗になるので、両者を混合するともっと綺麗になるかという、そうはいかない。こんなことをすると、塩素ガスというきわめて強力な毒ガスが発生して、下手をすると死んでしまう。これはまったくの非線形現象である。

もしあなたが今後、ラブレターを書く可能性があるなら、それもまた非線形性が強いことに注意したほうがよい。たしかに、ラブレターを書くと振り向いてもらえる可能性が上がるだろう。しかし線形的発想をここで展開すると、1通書くより2通書いたほうが2倍振り向いてもらえる、とってしまう。ということは100通書けば100倍、1000通書けば1000倍振り向いてもらえることになる。しかしこんな愚かな発想を実行に移せば、振り向いてもらえるどころか、警察に通報される。

世のなかには非線形性に満ち満ちており、こうすればこうなるだろう、と勝手にやったことが、そのまま実現するということはむしろまれである。思いもかけないことが起きて、とんでもない結果になることがしばしばある。

計算量爆発と非線形性という二つの問題は、「選択の自由」という概念を無意味化する。選択の扉は無数にあり、しかも扉に描いてある絵は、まやかしである。選択肢が十分に与えられているということに、どれほどの意味があるというのであろうか。このようなものを与えられた上で、扉を開けた結果に責任を引き受けると言われても、それはできない相談である。これを強制されるならそれは、「自由の牢獄」にほかならない。

三つ目の興味深い点は、選択の自由が無意味であると悟った主人公が、今度は、すべてが神によって事前に決定されており、その導きに従う以外に人間のできることはない、という極端な結論にジャンプすることである。

「自由の牢獄」を逃れて盲目の乞食となった主人公は、「神の御意のままに」を意味するインシアッターという名を名乗り、自分は「人の授かる最上のものを持っている」と考えている。つまり、神の御意に盲目的に従うことこそが、真の自由だというわけである。

しかし私は、このような決定論的宇宙観を受け入れる気にはなれない。なぜなら、……この考えこそが、人類を滅亡に導いている諸悪の根源とも言い得るものだからである。私たちは、この物語の提供する「選択の自由」も、「神の御意に従う自由」も、いずれも受け入れるわけにはいかない。

人間の自由を「選択の自由」とする見方は、西欧思想の根本に据えられている。この前提なしに「自由」について論じることは、ほとんど不可能なようである。

ところが、エンデの物語が示すように、そのような自由は人間を自由の牢獄に追い込んでしまう。その恐怖に耐えられない場合、全知全能の神に服従することで、精神の平安を求めることになる。まさに、扉が一つ残らず消えたことを神に感謝するエンデの物語の主人公のように、である。このどちらもが、人間の精神のための自由を奪う、危険な思想である。

(注1) アメリカの哲学者ハーバート・フィンガレット。問題文として引用した部分の前で、フィンガレットの次の言説が引用されている。

「選択 (Choice)」という問題を、哲学的観点から考える場合、私たちのほとんどは普通、何らかの目的のための手段・行為の選定 (selection) を意味するもの、と言外に想定する。たとえ固有

の目的それ自身が明示されていないような「選択」を考える場合でも、暗黙のうちに、はっきりとした欲求の対象となる、はっきりとした目的がある、と想定している。たとえばAが好きで、Bが嫌いだとする。するとAを選択する。この場合、選択の対象も欲求や嗜好も、ともに質的量的に確たるものとして与えられるとされる。なすべきことは「断固たる」「決心」のみである。選択は、肩をいからせて、前進するという身振りと結びついている。明らかに私たちは、選択を「岐路 (crossroads)」というモデルで考えてしまっている。選択の際には、私たちは岐路に立ち、次の一歩を踏み出すために、慎重にであれ軽率にであれ、どちらかの道を選ばねばならない。「岐路」は人を決断の「瞬間」に置く。これが、選択の本質についての省察に決定的影響を与えがちなステレオタイプである。

(注2) 原文のこの箇所には、次の注記が付されている。

網野善彦、『増補 無縁・公界・楽』。網野は日本社会に根ざした自由の根源を求めて中世文書を博捜し、「無縁」「公界」「楽」という三つの言葉に行きついた。この三つはそれぞれニュアンスを異にするが、このなかでもっとも重視されるべきは無縁である。人々のつながりたる「縁」が呪縛に転じたときに、そこから逃れでて「縁切り」をしようとする人間の本源的衝動を基盤として無縁は成立する。この縁切りを可能にする社会的な慣習や制度が無縁の世界を創出する。〔以下略〕

(注3) 問題文として引用した部分の前で、「計算量爆発」について、次の記述がある。

ここに2種類の財があるとする。それぞれの財について「買う／買わない」という選択肢しかないとしよう。2種類の財については、

- ①「財Aを買う、財Bを買う」
- ②「財Aを買う、財Bを買わない」
- ③「財Aを買わない、財Bを買う」
- ④「財Aを買わない、財Bを買わない」

という四つの選択肢がある。〔中略〕

これが3種類になると、2の3乗で8組の選択肢ができる。4種類なら16組、5種類なら32組。いわゆる^{ねづみざん}鼠算に組み合わせがどんどん増える。10種類で1024組、20種類で104万8576組、50種類になると、

1, 125, 899, 906, 842, 620組

になってしまう。これはどういう数かというと、1秒に1組数え上げていって、数え終わるまでに3570万年かかってしまう、というような莫大な数である。こういう具合に種類が増えると組み合わせが激増する事態を、「組み合わせ爆発」あるいは「計算量爆発」と呼ぶ。この膨大な数の組み合わせを、望ましい順にならべるには、さらに長い時間がかかる。

【問題文は、安富歩『生きるための経済学—〈選択の自由〉からの脱却—』（日本放送出版協会、2008年）からの抜粋である。原文の一部を省略し、表記を変更した箇所がある。】